

産神問答・仁多郡奥出雲町大呂

令和3年10月12日

収録・解説・酒井 董美

イラスト・福本 隆男



語り手 安部イトさん（明治27年生まれ）  
収録・昭和45年7月27日

**あらすじ**

昔があったげな。ある家のお母さんは妊娠していたげな。お父さんは急用があつて阿毘縁（鳥取県西伯郡日南町）みたいなどへ行かねばならんげな。夕飯を食べ終わるとすぐにお父さんは出かけたげな。阿毘縁の峠のあたりで眠くなつたそう、サイ（塞）の神さんのお宮へ寄つて、「サイの神さん。眠たあなつたけに、宿貸しててください」と言つて泊まつておつたげな。そうしたら、阿毘縁のサイの神さんが馬に乗つて来て、「サイの神さん、鳥上の方に産気がついたらに行きましよう」と言つたら、「お客さんがあつて行かれんけに、安産させてください」と言つたげな。いい男の子が生まれたげな。そうするとそのサイの神さんは帰つてきて、「かわいそうなもんです。蛇体の餌食に当たつて、二十歳に蛇体に取りられる生まれつきです」と言

つて帰つて行かれたげな。泊まつておつたお父さんは、「うちのことかなあーと思つて悪い気がしたげな。阿毘縁で用事を済ませて帰つたら、家ではよい男の子が生まれておつたげな。お父さんは、その子を助けようと、神さんを拜んでおつたり、お金を貯めておいて、その子が二十歳になるまでに神さん参りをさせようと、思つて、その子が二十歳になつたら、「今年、おまえは日本中の高神さんに参宮してもどれ」と旅に出したげな。高神さんのところを参つて、しまいに大阪の川口まで帰つて、宿屋に泊まつたげな。その晩は蕎麦でも食べようと出かけたら、道中で大きな大坊主に出会つたげな。大坊主は若者に向かつて、「どこへ行くか」と言うげな。「蕎麦を食おうと思つちようども、あんたも行きましたよや」と若者が言つたので、「そうじゃあ、ついて行かか」と大坊主もついて来たげな。そうして大坊主は、「一斗粉ほどこしらえてごしえ」と言う。その大坊主はソロゾロと全部食べたげな。

お金を払うことになつたら、大坊主は、「おれが出すから」と言つたけれど、「わしのご馳走しますから」と若者がみんなお金を払つたげな。それから別れるときにその大坊主が言うには、「おまえはおれの餌食に当たつちよつて、今年、おまえを呑まにやならの年だとも、高神さんが手え出されて、おまえを避けちよられえので、絶対に呑ましてごさの。そうに今晚はおまえが蕎麦を、ご馳走したけん。もうまえを呑まんけん。おまえはいんで、親孝行して世を送らつしやい」と言つてどこかへ去つて行つたげな。若者は、帰つてその話をしたら、お父さんが、「阿毘縁のサイの神さんに泊まつちよう時分に、そういうわけだった。そげなことは言わずに、おまえに旅をさせただが」と話されたげな。

**解説**

関敬吾博士の『日本昔話大成』によれば、「本格昔話」の「運命の期待」の中の「産神問答」に戸籍を認めることができる。  
（元島根大学法文学部教授）

